

令和5年度 第1回 介護福祉学科 教育課程編成委員会 報告書

日時：令和5年9月19日（火）14：45～16：15

場所：zoom形式

参加者名

委員 大久保 佳世（社会福祉法人はるび 特別養護老人ホームはるびの郷施設長）

委員 佐々木 幸（日本介護福祉学会・日本社会福祉学会）

委員 山下 浩和（株式会社ケアコネクトジャパン）

教員 細野 真代（介護福祉学科学科長）

教員 岡本 啓介（介護福祉学科教員）

職員 星 朋美（教務課係長）

職員 深澤 史（教務課係長）

職員 鈴木 慶紀（教務課）

議題：

1、はじめに

令和5年度の入学者数状況について報告した。

2、今後に向けてのカリキュラム作成について

- ①実習先へのアンケート結果
- ②新設カリキュラムについて
- ③インターンシップの実施報告

①実習先へのアンケート結果

鈴木職員)

介護福祉学科の魅力づくりの一環として、現場の声を基にした新しい授業の新設に向けた「卒業生に身に付けてほしい能力」のアンケートを実施し、その結果を共有した。このアンケートを通して「ホスピタリティ」の授業を新設することに決定した。

[各出席者からの意見]

大久保委員)

職場の研修で行う内容も含まれているため、授業内容は良いと考える。昨今、介護職による利用者への虐待問題等がある中で、対人援助の基本として、セルフマネジメントのスキルを身に付けられることは、非常に良い。それに加えて、サービスとホスピタリティの違いを伝えてもらいたい。

佐々木委員)

現在、介護福祉士には、ホスピタリティを始めとする利用者へのケアと同時に、介護職チームにおけるリーダーシップが求められている。しかし現場としては、卒業後の介護福祉士がいきなりリーダーシップをとることは難しい。現場の人手不足の状況では、高い専門性やリーダーシップよりも、介護の基本的な知識や技術を身につけた人を求めていると考えられる。そのため、今後の養成教育においては、両者のギャップをどう埋めていくかが課題となるだろう。

さらに、外国人介護職や留学生の増加により、今後の教育には「多文化共生」の視点も求められる。ホテルのような一時的に利用する場でのホスピタリティとは異なる、多様な文化的背景をもつ人が長期的にケアし合う場における「介護のホスピタリティ」を確立し、教育を通してこれを伝えていってほしい。

②新設カリキュラムについて

・同行援護従業者養成研修について

細野教員)

在学中の資格取得に向けて「同行援護従業者養成研修」を取得できる必修の授業を新設する。設置した理由は、障がいの方への支援も視野に入れたためであり、来年度のカリキュラムに入れることを決定した。

岡本教員)

「同行援護従業者養成研修」は、現状のカリキュラムを極力変更せず、現職教員で賄える資格となる。また現在、高齢者施設は、視覚障がいをお持ちの方は少ないが、白内障から目に障がいを負うケースがあること、障がい者ヘルパーを希望する学生もいたため今回のカリキュラムにした。

[各出席者からの意見]

佐々木委員)

「同行援護従業者養成研修」は、声掛けでのコミュニケーションが重要で、高度なコミュニケーション能力が必須になる。これはまさに、介護福祉士としての真髄となる部分なので、ここについてもしっかりと伝えていってほしい。

・キャリア×福祉について

深澤職員)

自分のキャリアの中で、どのような資格や学びが必要なのかを考えるカリキュラムを設置する。当校は介護福祉士を養成することが、1番大切なことであるが、+αで学生の人生を考えることも養成校にとっては重要であると考えている。実施内容については、アウトプットを中心にした授業を検討している。

岡本教員)

一般企業の高齢者施設の声として、養成校の卒業生の就職先は、ほとんどが特別養護老人ホームや有料老人ホームとなっており、一般企業への就職が少ないとしている。現状、一般企業の高齢者施設に就職する学生は、福祉系ではない大学生が大半を占めており、初任者研修から学ぶことが多い。これらのことを踏まえると、養成校の卒業生には、管理者になること等、早くからキャリアパスを考える「キャリアを追求する授業」の必要性があったため、今回新たに新設する。

そのため、介護職1つで仕事をしてきた方、介護福祉士の資格を持ちながら他分野で活躍をしている方の生の声を伝えていただき、学生には多面的な角度から様々な声を受け取ってほしい。

[各出席者からの意見]

佐々木委員)

カリキュラム改正で「人間関係のコミュニケーション」の内容にキャリア形成が加わったが、この科目の教育でも、自身や介護職チームメンバーのキャリア形成を意識しながら新しい知見を伝えていく必要がある。

また、留意点として、学生の視野を広げることは意識しつつ、先に指摘したような介護現場の現実とのギャップを伝えていくことも大切で、それぞれの介護現場に共通する問題点としてどのようなものがあるのかを、学校側が伝えていくことが重要。さらに、今回のことを受けて、私は社会福祉法人の介護福祉、一般企業の介護サービスが共通して持つべき理念や運営方針を我々教育現場が創造していく必要もあると認識した。

大久保委員)

社会福祉法人は、一般企業とは異なる人材を採用しており、人材の傾向としては、競争力がない印象がある。実際、施設の中でも、介護福祉士だが、責任を持って仕事をすることや、リーダーシップが欠けている部分があるため、学生のうちから視野を広げ、可能性を引き出す教育を受けることは、良い試みである。

また、今回の委員会を通して、社会福祉法人は、これまで福祉を掲げることで守られてきたところもあるが、今後は時代が変わり、そのようなことはなくなると予測する。そのような時代の中、利用者が豊かに生活していけることを意識して、福祉に関わる企業・社会福祉法人が一体となって、お互いの良いところを活かして、足りない部分を補っていくことが必要であると考えていることができた。

③インターンシップの実施報告

深澤職員)

当校の介護福祉学科1年生が実習先以外の施設を訪問するインターンシップを実施した。内容としては、施設の魅力を見出し、インターンシップ先の採用ホームページ作成に貢献することであり、最終日にはその内容をプレゼンテーションするものにした。結果として、実施先から高評価を得ることができたため、引き続き、学生の視野を広げられるような取り組みを実施していく。

まとめ

- ・実習先へのアンケート結果から「ホスピタリティ」の授業を新設することになった。
- ・障がいの方への支援も視野に入れたいため、在学中に取得できる「同行援護従業者養成研修」を必修の授業として新設する。
- ・管理者になること等、早くからキャリアパスを考える「キャリアを追求する授業」の必要性があり、学生には多面的な角度から将来を創造できるように「キャリア×福祉」を新設する。
- ・実習先以外の施設を訪問し、ホームページの採用ページを作成するため、施設の魅力を探るインターンシップを実施した。その結果、魅力出しに大きく貢献し、実施先から高評価を得ることができたため、引き続き、学生の視野を広げられるような取り組みを実施していく。
- ・これらの取り組みは、当校が介護福祉士の養成校である方向性はブレがないように、軸をしっかりと立てて、実施していく。

以上